



お米は、病気のぼくに力をくれた

安中市立西横野小学校 4年

塩谷 祐貴

ぼくは三年生の十一月にまん性虫すいえんという病気で入院しました。入院の前の日からお腹が痛くて、食べられなくなりました。入院してからは『絶食』でした。点滴を一日中していました。痛みが良くなってくると、お腹がすいて眠れないほどでした。入院して四日目の朝、お医者さんが「おもゆから食べてみようか。」と言ってくれました。ぼくはやっとご飯が食べられるとうれしくなり、お昼ご飯が楽しみでした。すっごくお腹がすいているから、病院のご飯でたりるかなあと心配しました。やっとお昼ご飯が運ばれてきて、その内容を見てびっくりしました。おもゆというおかゆの汁と具のない味そ汁と牛乳と栄養のジュースでした。かむものはなくて、みんな液体でした。それでも、おもゆはご飯のいいにおいがして甘い味がしておいしかったです。でも、スプーンで五回くらいで終わってしまい、お腹はいっぱいになりませんでした。液体だけの食事を二日くらいしてから、お米のつぶが少しあるおかゆが出るようになりました。歯でお米をかむと、何だか急に力がわいてくる感じがしました。だんだんとおかゆの汁の中にお米のつぶが増えてきて、それを食べるとぼくの体も良くなってきました。ごはんには、体を元気にするパワーがあると思いました。それから、お米は、おもゆやおかゆになると、病気の体にやさしくて力をくれる食べ物になるんだということがわかりました。退院する前日の夜、ごはんのつぶだらけのおかゆになりました。ぼくはそのおかゆをみて、「やった、お米がいっぱいだ」と言いました。お母さんが「よかったね。ゆっくり食べなさい。」と言いました。病気になって一週間ぶりにお腹いっぱいになりました。つぶがいっぱいのおかゆはすっごくおいしくて、おかずがなくても食べられました。元気な時は、用意してもらった食事に文句を言った事があったので、不思議な感じがしました。退院してからは、おかゆを持って学校にいきました。何日かして病院へ行ってお医者さんから、「普通の生活でいいですよ。」と言われて、ぼくは、「よっしゃ。」と心の中でガッツポーズをしました。

ぼくはこの入院で、ご飯をお腹いっぱい食べられる事は、普通のことではないんだとわかりました。お米をおいしく食べられる健康な体とお米を作っている農家の人、食事を作ってくれるお母さんや給食センターの人たちのおかげなんだとわかりました。それから、お米のおいしさとやさしさのパワーを知りました。お米の大切さとお米を食べられる幸せもわかりました。ぼくは元気になって水泳の練習ができるようになりました。毎日のように泳いでいます。練習の前に車の中でお母さんの作った塩むすびを食べると、やる気がわいてきます。ご飯をたくさん食べて大きくなって速く泳げるようになりたいです。